

言語上よりみると、これも同じく染退川が主要な分界になつてゐる。即ち釧路十勝の沿岸を南下し襟裳岬を北上する一つの言語系統と、日本海岸を南下し長万部地峡部を噴火灣に出て依然南下する分派と、室蘭に出て日高に達する分派とがあり、さらにそれは二分して一は沙流河谷をさかのぼり、他は染退川の線に達するということができる。

口碑による個々の部落の資料は信憑するに足りないが、その二三を参考までに挙げて見よう。

平取村幌去には十勝より古く来住したフモシルシを祖とするものと、沙流原住というシサンタルと、松浦武四郎(後出)によつて津軽半島(東北アイヌの最後の部落)より来住したと指摘された三つの系統のものがあつたといわれる。

平取市街地では十勝(釧路、北見)系のフモシルシを祖とするものと、鷓川奥シナンタルを祖とするものがある。

同村平賀では二派あるが、共に鷓川奥のシナンタルより発して、後にたがいに分派して紋章を異にするに至つたものである。平賀に近い門別村福満の一族(鳩沼氏)はその祖を北見に発し、二風谷に至り、後鹿島の関係上門別川上のニナツミ(広富)に移り、さらに明治になつて盤業授産のために平賀村に移され、明治三十一年の洪水によつて現地に移つたといわれる。同じ門別村幾千世アイヌの祖は新冠において、漂着したアトヤッコなる女性と婚し、門別に移りすんだが後門別会所の和人と混血したという。

なお、胆振の鷓川では、その祖を漂着姫とし、幌泉—門別—門別奥—福満—鷓川奥イタベツ—鷓川珍(現在)に至つたと信じてゐる。

様似村岡田では釧路—幌泉—岡田といひ、浦河町杵臼では饑饉の年に食を求めて十勝より放浪してここに住みついたと称してゐる。

## 二 遺物と口碑

九

## 第一編 開発前史

一〇

### 三 アイヌの自然と生活

#### 一 動植物の利用

熊祭によつて知られてゐる通り、アイヌは熊を狩り或は飼育して肉をたべ皮を利用した。これらには特別の祭式がともなつていて、それはまた社交の機会ともなつた。熊狩には犬とフシ矢が欠くべからざるものであつた。

鹿は夏になると西蝦夷地方面に分散して生活してゐたが、冬になると積雪のため笹が埋れまた歩行も不自由になるため、みな東蝦夷地に移動した。この鹿群の通路は毎年ほぼ一定して、そこは自ら一つの細道となつてゐた。アイヌはこのようなところをまぢうけて、犬を使つて追ひだし、獵獲したものである。また平取村紫雲古津でユツクチカウシの称ある屋のように、台地上を追いつめて崖端から墜死させたこともあつた。これはトナカイ期原人の野馬を狩つたのと全く同じである。平取村荷負のカンカンピラも同様といわれる。鹿肉はそのまゝ煮食するほかラカンという燻肉に製して保存し、脂肪も保存して利用した。日高地方にアイヌの多い有力な理由は、鹿が多く集合する地域であつたからといわれる。鹿皮、鹿角は交易品としても重要なものであつた。

狼はホロケウまたはエタコイキといひ、アイヌの生活には余り関係がないが、鹿にとつては恐るべき害敵であつた。

鮭は鹿と共にアイヌの主食をなすものであつて、カムイチエブ(神魚)といふことはよくこのことを物語つてゐる。鮭は古くはウライ(やな)によつてとらえ、また木の皮であんだ網をつかつた。マレツボという鈎もたくみに使つてゐた。初冬にとつた鮭を木にかけて凍れはしとしアマトと称して高足の庫(プー)に貯蔵した。それから冷凍したものはルイベといつた。鮭鱈以外の魚は余り重視されなかつたが、ただ沙流川のシシャモ(柳葉魚)の例によつても知られるように、鮭鱈の凶漁の年にはもちろん他の魚によつて

生命をつないだのである。享保八年（一七二七）より九年にかけて鮭の溯上が少なく、石狩で約二百人の餓死者を出し、千歳でも少なからぬ死亡者を見たというから、いかに鮭に依存し、鮭凶漁の年は悲惨であつたかが知られる。

鹿も大雪または凍雪のために多数斃死して、その後幾年かアイヌの生活をおびやかしたこともあつたと考えられることは明治十二年（後出）の事例からしても想像することができる。

鯨は本土においても七浦灣（七浦湾）といわれたと同様に、アイヌにとつても最も歓迎された。しかし毒矢などで捕えようと苦心したことが記録されているが成功したことはなく、すべて寄鯨（寄鯨）である。肉よりも脂肪の採取が主な目的であつた。寛政十一年（一七九九）六月に浦河をおびやかす人々を殺傷した猛熊も、寄鯨の臭氣をしたつてやつて来たものであつた。これは御徒目付細見権十郎の勇敢な働きによつて、刀を以て仕止められた。

衣料は毛皮の外にアツシを用いた。即ちオヒョウの木皮をさいて織り、これを巧みに染色して特色のある紋様をあらわした。イラダの麻は弓の弦或は婦人のテバ（貞操帯ともいわれる一種の護符）に製した。縄文式土器の表面に押捺された縄をみるに、よりよく可成り緻密である。察するに土器製作の当時、縄のより方が創造され、この最新文化を誇つてこれを土器の表面にうつしたものはあるまいか。アイヌ婦人の手にほどこされた入墨も結繩（結繩）に起源すると説く字者もある。

古くアイヌは肉食を主として、寒さに対する抵抗力がよく、薄雪の中はよく跣足で歩き、嚴寒の候になつて、鹿の脛の丸剃ぎのケリ（ケリ）或は鮭皮（鮭皮）の履（履）を穿いた。雪上はテスマ（テスマ）といふかんじき（かんじき）を使うこともあつた。

アイヌの作製した木工具の中で、もつとも大きいものは丸木舟であるが、古くは大木の中を焼いてくりぬいたものと考えられる。陸上が密林草生につつまれて跋涉しがたかつた昔においては、細流に丸木舟を浮べて進むことは唯一の手段であつた。今日森林は伐られ植生も変化して、概ね河水はかかっているから、原始境における舟の恩恵を想像することは困難であるが、かつては河川による舟運が大に行われていたのである。丸木舟のほかには沙流川においては木皮舟及びいたどり舟、よし舟も行われた。後の二者はいたどりなりよしなりを束ねた上に荷物をのせて筏としたにすぎないが、これは文化史上興味深いことである。雪上は柴（柴）（柴を束ねたもの）

### 三 アイヌの自然と生活

## 第一編 開 発 前 史

の（）をもちい、熊などはそのまま滑らせて運ぶこともあつた。

食用植物も広く知られているが、ウバユリ（トレッツ）を第一とした。春の発芽前にほりとつて澱粉を製し、或は団子として乾燥した。薬用植物も多く、これらについてはバチエラー博士、宮部金吾博士等によつて夙に研究されている。

農業がアイヌに行われるようになったのは、寛政のはじめころからと思われるが、安政二年松浦武四郎の巡回した当時には、すでに各所に耕地があり、平賀村の酋長が粟飯を接待したことを記している。その作物は粟、稗、豆、いも、かぶ等で、野生的な品種であつた。耕地は河岸等の草の少ない土地に粗放的に作付けされた。農具としては木の枝、鹿の角、鎌などで、後には和人から鋏が支給された。耕作は婦人の片手間仕事であつて、肉食を主としたアイヌにとつては、さまで重要ではなかつたのである。

家屋は堅穴時代は所謂三角小屋にすぎなかつたが、後恐らく和人にならつて、柱をたて屋根をのせるようになったものと思われる。展根はケズニ（ケズニ）と称する斜材を入れて合理的に工作するが、ケズニの法はカラフトや、大陸系民族などにみられ、わが国にはないものであるから、或は穴居時代すでに大陸文化が移植されていたのではあるまいかとも想像される。展根は地上で相立て、後で柱の上におしあげたから、あくまでも三角小屋が主体であるという考えが残つていた。家の方向、間取り等は一定して、異式のもの稀であつた。

幣（幣）は柳またはミズギを使用し、弓は一位か桑である。櫛皮はたいまつとし、また盆につくつた。入墨（入墨）の原料は櫛皮の煤である。

## 2 地理的知識

狩猟のために山谷を跋渉することはアイヌの主なる生業であるから、(一)地形に対する判断と記憶にすぐれている、(二)天候その他の自然現象に敏感である、(三)おびただしい山谷の地名を記憶している、(四)経路を巧みにつけていることなどをあげることが出来る。したがつて古来よりよき土地案内者として、和人の入地や地理調査者に多大の利便をあたえた。

アイヌ道のあるものは、地形をもつとも巧みに撰択して自から形成された鹿道を利用していることがすくなくない。昔は鹿が甚だ

多かつたので、各地にその通路がアイヌ地名を以て指摘されている。沙流川及び支流糠平川におけるこれらの地名を示すと次の様である。

パンケユクトラシ	上の鹿越
ペンケユクルベシベ	上の鹿の越路
クチャヨルシナイ	狺屋ある沢
ヌカンライ	何処でも見える(鹿の好むところ)
ファイラルベツ	瀬大なるところ(鹿こえがたし)
ホルカン	却流の河谷(曲流)
ルベシベ	越える路
シユンベツ	西の川
シキウシナイ(宿志別川)	かや草の沢(鹿がこのむ)
アイマベツ	矢の浮き流れる川

この附近は鹿の群が北部より日高山脈に集中する要所であつたため特に著しいようである。

このような小地名は松浦武四郎の地図や永田方正の蝦夷地名解等に多く記載されているが、狩猟時代を過ぎかつた今日では概ね廃滅してしまつて、僅かに一部の古文獻や古老の記憶に求めるほかはない。

日高地方の総括的な地名は、必要となかつたと見えて全然存在しない。既に述べたように、伝承の上からすれば鶴川筋もまた日高地方に包含されるのが自然のようである。はじめ蝦夷地を東西に二分し、東部も口と奥に区分した。日高は海上交通を主とした時代においては比較的松前に近く、口蝦夷の名にふさわしい重要な土地であつた。

後世場所設定にあつて、コタンの形勢等から七場所を決定したが、その後幾分の移動が行われた。そしてその中心的コタンをと

### 三 アイヌの自然と生活

## 第一編 開発 前史

つて場所名とし、漢字を当てていった。天保十二年(一七〇〇)蝦夷島郷帳によれば当時浦川のみ漢字であつた。場所名は明治二年松浦武四郎の案によつて郡名とされ、七郡を合して新たに日高国と命名された。これは日本書記に北方に日高見国(北上川の国)ありというのに拠つて、その氣候風土と考へ合せて撰ばれたものといわれる。従来日高地方は時に胆振と合し、或は浦河を界として二分され或は十勝と合併して統轄される等必ずしも七郡が一体として利害を共として来たとは言えないが、ここにはじめて日高国として明確に一の地域社会を形成し、相携えて開発向上に努力するに至つたものである。七郡の原名、意味は概ね次の通りである。

沙流	サロベツ	かや多き川
新冠	ニカフ	楡の皮
静内	シフツチナイ	大祖母
三石	ハマニツワシ	魚焼ぐし
浦河	ウララベツ	霧の川
様似	エサマニ	かわうそ
幌泉	ホロエンルム	大岬

なお、平取はピラウトリで断崖の間にある場所の意味である。従来村名のよみ方が数通りあつたが、昭和二十四年ピラウトリと呼称するように定められた。日高村はもと右左府村(両方)へ出入口のあるところの意と称したが、昭和十八年日高山脈の山ふところにあるところから日高村と改めたが、十町村中唯一の日本名である。門別村はモベツ即ち遅流の川を意味する。